

「相中相高百年史」より
(戦時体制下の相馬中学校 6)

6 相中生の通年動員

1944 (昭 19) 年の五年生に限って勤労作業をみると、

4 月 22 日 木炭運搬作業 (玉野村) 5 月 25 日 石材運搬作業 (山上村)

6 月 7 ~ 7 月 1 日 春季勤労働員 7 月 2・3・8・10 日 原町飛行場作業

次いで、7 月、半ば通い慣れた学舎に決別し続々と軍需工場へと動員されて行く。

この 43 回生を例にみると、154 名の生徒は、7 月 15 日、日東鉱工場福島工場へ出動、3 月 27 日現地で卒業式を挙げるという「通年動員」であり、この間 8 月と 10 月 (冬支度のため) の二度帰省したのみで、級友と工場内の春光寮で生活をともにしたのであった。

さらに、第四学年生 (相中 44 回卒) 第一班 70 名は、神奈川県川崎市内東京芝浦製作所川崎工場へ、同第 2 班 67 名は、東京芝浦電機製造所大宮工場へ、10 月 17 日、午後 6 時 55 分中村発列車で、出動していった。

同じ日、第三学年生 (相中 45、46 回卒) 181 名は、一番遠く離れた横浜市磯子区にあった海軍技術廠支廠に出動へと夕闇迫る中村前に集合、大勢の父兄や親族達の見送りのなか、出動生徒は校歌や軍歌を声高らかに歌い、臨時の夜行列車に乗り込み車中の人となった。

1945 (昭 20) 年 4 月に進級した三学年 (相中 47 回卒) は、県内石川郡沢田村に当時建設中の海軍飛行場作りに動員され、新学期の授業を始めたばかりの 4 月 19 日、壮行式もそこそこに翌 20 日中村駅から出発した。

夕方石川駅に到着、最初数日は石川小学校内にあった石川実科女学校の寄宿舍と校舎の一部に分宿したが後に甲、乙組は長泉寺、丙、丁組は乗蓮寺と分宿、6 月 5 日まで雨で作業ができぬ日を除き、土曜、日曜無しの野外での土木作業であった。



相中第 47 回卒業生

当時十分な食料がなく昼食に持参する弁当には自分で握った握り飯と数切れの漬物しかない時代であった。それだけに家族の人が慰問に来られた時は生徒達の大歓迎を受けるのが常であった。出発当初に217名だった生徒達であったが途中で病気、その他の理由で帰校を余儀無くされる者があった。

帰校した三年生は6月9日より登校するようになったが相変わらず授業の代わりに次回動員の特別訓練が続けられ7月7日より27日まで、本土決戦に備え海岸塹壕作りと軍の築城作業に専念する。同年2月16日午前9時頃米軍の艦載機による空襲が始まり終戦まで続いた。終戦直前毎日のようにグラマン戦闘機による機銃掃射に遭い、新沼地区にあった朝鮮人部落の朝鮮人に怪我人が続出し、大手先にある大井病院に担ぎこまれた。当時鉄道不通もあって中村在住の三年生が、リーダーとなって怪我人の搬入に駆り出された。

8月10日 戦況の熾烈さにより、県の通達で在校生全員登校停止となった。

8月11日 艦上機による頻繁な空襲から学校の重用品の消失を避けるため奉安殿に安置されていた御真影並びに勅語謄本を山上国民学校に奉遷した。

8月12日 学校中の渡り廊下を取り壊し、重要書類を全て疎開する措置をとる。

8月15日 午前渡り廊下の取り壊し作業を終えた後、正午玉音放送があり、学校長訓示「我々は今まで死して皇国護持に戦えるも、今後は生きて国體を護抜くべし、尚また爾後の苦難に堪えよ」と別命あるまで全員登校停止となる。

職場において終戦の詔勅を聞いた動員学徒は340万を越えたといわれている。

(3月28日 選択転記・文責 村山)